

渡辺徳太郎著作集

- 1 山形商業談
- 2 芸亭と石上宅嗣
- 3 紅花の話
- 4 紅花の話図解
- 5 紅製法略図解
- 6 山形の正月の今昔

解説
後藤嘉一

解説

後藤嘉一

渡辺徳太郎は明治後期・大正・昭和前期における山形地方の文化史上、忘れることのできない中核的人物である。(正確には渡邊徳太郎であるが、本文では現代慣用の渡辺徳を使用する)



渡辺徳太郎

山形は江戸時代において領主の更迭が甚しく、不在領主の分領が交錯して、地方統治が分裂していたために、まとまった藩学が無く、庶民の教学・教養は主として民間人の手によって行なわれた。僧侶・神官・医師・俳諧師などが、それぞれの分野で私塾(寺子屋)を開き、地主・豪商等が資力を投じて自ら学び、また他を指導した。

幕末から明治初年にかけて、これら地方文化界の頂点にあったのが、山形十日町の医師・漢学者・画家として活動した細谷風翁であり、次いで明治・大正・昭和においてその頂点を成したのが渡辺徳太郎である。

もちろん、政治・経済・教育その他、ほとんど行政的体系を成さなかった江戸時代と、近代国家体制の整備された明治・大正とでは、その内容・形体とも雲泥の相違はあるが、風翁といい、徳太郎といい、市井の一市民より出て、その人格・識見・行動が、地方文化の中核となり、時代・地域に及ぼした影響力の大きさ

については、全くその軌を一にする。

渡辺徳太郎は明治三年（一八七〇）三月七日、羽州山形旅籠町渡辺儀兵衛の三男として生れた。（渡辺家および父儀兵衛については後章にのべる。）

徳太郎は幼少より将来は学問をもって身を立てるべく志し、宗家渡辺吉兵衛方に丁稚奉公をしながら早稲田講義録により独学し、明治二十年上京、慶応義塾大小学普通部第二学年に編入学し、同部卒業の後、神田一橋の東京高等商業学校に入学した。同校には同郷の先輩に肴町の鹿野清次郎（後に同校教授）・新聞善八（後に山形市長）が居り、後輩として三日町の加藤保吉（後に七日町虎屋大沼家を嗣ぎ、山形市長・山形市名誉市民となる。）が附属主計学校に入学した。

明治二十七年十一月七日、長兄儀兵衛（二代目襲名）三十歳にして四児を遺して死去、家政整理のため一人婦郷、後述のように長兄の未亡人ヨネと結婚、明治

三十年に東京高等商業学校を卒業して帰郷し、山形県立山形中学校の教諭となり、英語科を担当し、山形県師範学校で商業科を担当講義した。

山形中学校は県師範学校附属中学校として発足し、校舎は県庁前（現在の市役所構内）にあったが、学制改正で山形県尋常中学校となり、さらに明治二十四年、山形県立山形中学校となり、入学者増加のため、新たに新築東通りに新校舎建設に着手し、二十六年竣工して九月に移転した。すなわち現在の山形県立山形東高等学校である。

徳太郎が奉職した明治三十年当時は、日清戦争後の戦時景気により日本経済は急速な発展をとげたが、たちまち反動不況に見舞われ、全国的な景気沈滞に陥っていた。特に山形地方は江戸時代以来の紅花が市場価値を失い、これに変わり、養蚕・生糸によってようやく活路を見出した時代であるが、蒸汽船による太平洋沿岸航路、東北線鉄道の開通により、最上川舟

運・日本海航路が衰退し、市場都市としての山形の経済価値は著るしく後退し、商業活動は極度に沈滞していた。その打開策として山形商業会議所が設立され、また山形第八十一国立銀行は、その存続期限到来とともに民間において業務継承すべく、株式会社両羽銀行が設立されるなど、山形商業界にも旧態脱却、新時代対応のため方策が模索されていた。このときに東京高商卒業の新進学徒として迎えられた渡辺徳太郎に対する期待は大きかった。亡父儀兵衛以来、最も縁故の深い国立銀行の民营移管、商業会議所の運営については同族の三浦権四郎、宗家の渡辺吉兵衛、義兄の渡辺弥太郎、そのほか三浦新兵衛・同和平・実兄正三郎等が一族をあげて関与しており、徳太郎は教壇に立つかわら、山形商業の再興について常に相談をうけ、斬新な知識を披瀝してこれを援け、かつ山形商業の体質研究に着手した。その結果、これまで陸の孤島化していた出羽内陸、山形地方にとって最も重要なことは、新

しい時代に対して眼を開かせ、新知識を吸収するため
の教育の振興でなければならぬとの信念を固めた。特
に因襲と伝統に固執する山形商業界に対しては、近代
経済の機構、流通の原理等につき基本的な再認識が必
要であり、そのためには商業教育機関の設置が急務で
あることを力説した。

先ず全般的教育振興のためには、教育を単に行政機
関に委せず、広汎な市民参加が必要であるとして津田
信吉・石川利政等と協力、明治三十年に「山形市教育
会」を組織した。山形市には既に市制施行の明治二十
二年から同名の教育会があったが、これは教育行政に
ついて市長の諮問機関として市長の任命する委員によ
って構成されていたもので、これも明治二十六年に学
務委員制度が発足するとともに有名無実化していた。
ここに於て、全く自主的な会員制による民間機関とし
ての教育会を結成したもので、事業として夜間の実業
補習学校を開設し、商家の徒弟・従業員に対する教育

を実施し、また経済的に恵まれない家庭の子弟の上級学校進学を援けるため、「霞城育英会」を結成した。

徳太郎は市教育会の評議員に就任、進んで夜間の授業を担当した。この時代に県下各市・郡にも教育会が結成され、やがて「山形県教育会」に発展した。

また当時は、一般庶民の子弟で中等教育をうけることは極めて困難な実状にあり、学校教育をうけられない人々のために図書館の設置が急務であることを力説し、県教育会の事業として、明治三十六年四月に附属図書館を設置し、その担任者として運営に当たった。やがて明治四十一年九月十六日、東宮殿下（大正天皇山形行啓を記念し、県が記念事業として県立養徳園（非行少年教育機関）、県立自治講習所（地方行政中堅青年養成機関）を設置するに当り、県立図書館の設置を要望し、これを記念事業に組み入れ、明治四十三年五月「行啓記念山形県立図書館」を県庁前に建設、県教育会附属図書館の蔵書一切を県に移管し、徳太郎は山形

中学校教諭のまま、初代の県立図書館長を兼ね就任した。

中でも畢生の事業としたのは商業教育であった。明治二十年代の末から三十年にかけて萎靡沈滞した山形商業界は、三十年に旧山形城址に歩兵第三十二連隊が設置され、約二、〇〇〇名の常住消費人口が増加し、また三十四年には待望の奥羽線鉄道が開通、県下にさきがけて電燈がつくなど、都市様相は急速に文明開化された。これに対応して、商業者の自主団体として結成された山形商業会議所では、新知識注入のため渡辺徳太郎を顧問に推薦し、これを受諾就任して、まず真っ先に取り上げた問題は商業学校の設置であった。明治三十五年三月の同会議所の総会で、商業学校設立に関する意見書を決議して、これを山形市長（佐治吉左衛門）に提出、市はこれを取りあげ、市役所に北隣する元県立尋常中学校の敷地ならびに校舎の無償払下げを県に申請、今後二カ年間に市立商業学校を設置する

条件のもとに払下げが許可された。しかし間もなく、日露戦争の勃発によって新規事業は抑制され、僅かに三十八年度予算に開校調査費二〇〇円を計上しただけであつた。戦争終結と同時に、三十九年三月の市会で甲種中等学校としての市立商業学校設置を決議したが、市財政窮迫して着手に至らず、商業会議所では四十年に早期実現の意見書を決議して市に提出した。市は四十一年度より差当り乙種商業学校を開設すべく、準備費一、〇〇〇円を計上したが、会議所、並びに教育会では飽くまで甲種中学校の実現を要望し、市会は調査委員を挙げて財政・教育の両面から調査したが、たまたま山形市は人口増加の結果、小学校(第四小)を増設すべき必要に迫られており、義務教育優先の立場から、商業学校設置を棚上げし、代りに実業補習学校に商業科を置くことにした。翌四十四年五月の市北大火で県庁はじめ官庁街は全焼し、その復興のため教育施設は後まわしにされた。

大正四年に至り、火災復興も一段落ついた機会に、再び商業学校設置運動が興り、県立を要望したが容れられず、行き悩んでいたところ、三日町長谷川吉三郎より、同人所有の同町五六〇番地の旧株式会社山形米穀取引所跡地約七〇〇坪、倉庫八棟、事務所一棟をふくめ、商業学校施設として無償寄附の申出があり、大正六年二月の市会においてこれを受納し、同年十二月の市会で、生徒定員一五〇名、修業年限三年の甲種中等学校として市立商業学校を設置することを議決した。

この間において常に主動的な役割りを果したのが渡辺徳太郎であり、世論喚起のために、新聞に「山形商業談」を連載して商家子弟教育の必要を力説した。その識見と熱意に対し、市当局は初代校長就任を懇請し、約二十年間在職した県立山形中学校教諭を辞して、市立商業学校長に就任した。爾来昭和八年九月まで十五カ年間在職し、同校の基礎を確立した。建学の精神として「輸誠の精神」「先事後得の意気」「恭

敬勤勉・堅忍持久」の校訓三則を立てた。すなわち「誠を輸す」、まこと「事を先にし得を後にす」、いた「商業人・経済人としての勤労と責任」は、その後も同校の伝統となり、山形市内外の商業後継者養成に重点をおき、現代の市経済界・商業界の元老・中堅は、ほとんど同校卒業者によって占められている。大正十二年、商業学校入学希望者が増加し、十日町の校舎は狭隘を告げたので、移転新築について市・市会に要請し、敷地物色の結果、市南小荷駄町庚申裏一番地に決定、同年十二月市会で移転新築を決議、生徒定員三〇〇名として工事に着手、十三年九月三十日新校舎完成して移転した。翌十四年二月、定員五〇〇名に増加し、名実共に中等学校として再発足した。

大正末期から昭和初年にかけて、第一次世界大戦後の反動による世界的経済恐慌、わが国の金融パニック、農村経済の窮迫等に際し、県の代表的金融機関両羽銀行の再建整理のため、当時東京商科大学（前東京

高等商業学校）教授に在職中であった山形市四日町三浦権四郎家の当主、法学博士三浦新七の帰郷を懇請し、

三浦博士はこれを容れて両羽銀行監査役に就任、画期的な減資を断行して危機を突破し、昭和四年一月、同行頭取に選任された。実務に繁忙を極める中に、地方振興のためには、地方発達の歴史を正しく究めなければならぬとし、市立商業学校長渡辺徳太郎、山形師範学校長和田兼三郎、同校教諭橋本賢助、同校講師五十嵐晴峰、山形高等学校教授安斎徹、その他県下の学者を網羅して「山形郷土研究会」を結成、従来の郷土史観より脱却し、科学に裏づけられた正しい歴史の究明に新生面を開いた。渡辺徳太郎は三浦良之助とともに同会の運営を担当し、調査・出版に活動した。その一つとして、昭和六年十月十六日より三日間、市立商業学校主催で、同校に「三島通庸展覧会」を開催し、明治初年に山形県成立当時の資料、初代三島県令の遺墨等を蒐集陳列し、山形市発展の過程を明らかにして、

市民に多大の感銘を与えた。

昭和八年九月三十日、老齡の故をもって商業学校長を辞任したが、創立以来十五年間、産業教育・社会教育に顕著な功績あったとして文部大臣に表彰され、特に御紋章付硯箱を授与された。その間、日本図書館評議員・山形商業会議所顧問・山形市史編纂委員・霞城育英会名誉会員など要職につき、文字通り山形地方教育・文化の中心的指導者であった。同校友会「輪誠会」が中心となり、その恩徳に酬いるために寿像（ブロンズ胸像）建設に当り、昭和十年六月十一日、同校正門玄関に建設された。

退職後もっぱら商業教育・図書館・郷土史の研究を続け、その都度、新聞・雑誌への寄稿、ラジオ放送等によって発表し、地方啓発に當った。

昭和二十一年三月十日、病のため多彩な生涯を閉じた。享年七十六歳。渡辺・三浦一門の菩提所である見聞寺に葬むられた。法名誠道院釈傳徳。

二、家系

三浦・渡辺家

江戸時代末期から明治・大正にかけて、山形市北の財家として知られた四日町金三浦権四郎・吉野屋渡辺吉兵衛の両家は、もともと同族で、江戸時代中期まで東北真室・鮭川方面に在住した地方武士であったといふ（川崎浩良著『山形の歴史』下巻）。

いつの時代に山形に出て商業を営んだか不明だが、現在真室川町正源寺に三浦権四郎・渡辺吉兵衛、さらに同時に四日町に出て商業を営んだ太佐藤利兵衛が、安政年間に奉納した大般若経六〇〇巻が保存されており、それには、文化二年（一八〇五）から文政九年（一八二六）ごろの祖先の法名が記載されており、この時代までは右三家はこの地域に在地していたらしい。山形市内に名の出てくるのは天保時代以後のことで、幕末には三浦権吉が渡辺吉兵衛の出資のもとに、竜鳳丸

(八〇〇石)・海門丸(五〇〇石)の巨船を持ち、西廻り航路(最上川・日本海)、蝦夷(北海道)交易の海運業を営み、遠く樺太・沿海州方面まで商圏を拡大したといわれる。京・大阪方面との交易商業を営み、繰綿・古着・呉服・太物を取扱いようやく産を成した。

山形六万石秋元時代の御用達商人として、市南の長谷川吉郎次・村居清七・佐藤利兵衛・福島治助・長谷川吉内の五名が指定されていたが、弘化三年(一八四六)秋元氏は上州館林に転封、代って遠州浜松より水野氏が五万石として山形城主となるとともに、新たに三浦権四郎が加えられた。安政年間の『東講商人鑑』には、「太物小間物四日町三浦屋権四郎」が記載され、この時代から豪商としてランクされたと思われる。吉野屋は繰綿の輸入・卸売業を主とし、小間物・書籍等も販売し、明治以後は三浦屋は資力を土地投資に注いで大地主となり、吉野屋渡辺家は主として金融業を営んだ。両家協力して、山形第八十一国立銀行の経営に

当った事情については、本号収録の『山形商業談』に
くわしい。

山形商業界は古来、同族財閥を形成する慣習があり、同族間において相互扶助経営をしたが、分家・支店はもとより、婚姻・縁組等も同族間に行われる傾向があった。三浦・渡辺両家もその例にもれず、互いに系譜が交錯しており、詳細に触れることは省くが、渡辺徳太郎に関する直系的系譜だけを次に略述する。

渡辺儀兵衛

四日町渡辺吉兵衛(七代目)の長男で、渡辺徳太郎の実父である。天保八年(一八三七)四月生れ、安政二年(一八五五)十月、山形市七日町六四番地医師松浦玄意の女リヤウ(天保十一年六月生れ)と結婚した。性俊敏、時勢を見るの明があった。明治九年(一八七六)国立銀行条例改正に際して、早くもこれを創立すべく、三浦権四郎を中心として三浦・渡辺一族で五万円出資のもとに、山形に国立銀行設立の認可を申請した。しかし

条例改正の趣旨は、士族の金禄・秩禄公債の整理、授産を目的としたものであったので、商人のみの出資による国立銀行設立を認めなかった。一方において、山形市近郊の農村地主阿部幸八（渋江）・佐藤綱右衛門（落倉）・

細谷庄右衛門（谷地）・氏家栄田（若松）等十一名で、資本金六万円で旧山形藩・天童藩等の零細士族の公債を買収する予約のもとに、約二八〇名の株主を募り、国立銀行設立を申請、明治十一年十一月八日認可され、

「山形第八十一国立銀行」が成立した。しかし商業金融に不馴れな農村地主が経営に当たったため運用が不振で、しかも士族公債価格の暴落のため莫大な負債を負い、たちまち崩壊の危機に陥った。県令三島通庸の斡旋により、先に不認可となった三浦権四郎の経営参加を求められ、三浦・渡辺一族は金三万円をもって八十国立銀行の株式を引受け、三浦権四郎が取締役支配人に就任、三浦新兵衛・三浦和平・渡辺吉兵衛・渡辺儀兵衛が経営陣に参加、新兵衛と儀兵衛が実務を担当

し、ようやく金融機関としての機能を發揮するようになった（昭和三十一年五月、両羽銀行発行『両羽銀行六十年史』）。この頃から儀兵衛は健康をそこね、明治十二年八月死去した。法名釈義信。

儀兵衛・リヤウの間に、次の一女五男をあげた。

長女 トヨ 文久二年十一月二十七日生、渡辺弥太郎に嫁す。

長男 儀兵衛 元治元年九月八日生、幼名栄太郎、二代目儀兵衛襲名。

二男 正三郎 明治元年三月十二日生、三ツ丸吉野屋

薬種商、山形市会議長・山形商工会議所副会頭。

三男 徳太郎 明治三年七月三日生。（前章）

四男 玄太郎 明治五年二月廿二日生、同二十七年五月大阪に移住。

五男 亀太郎 明治七年四月十一日生、母方の実家松浦玄意の養嗣子となる。

二代目渡辺儀兵衛は明治十六年三月、宗家渡辺吉兵衛の四女ヨネ（明治元年二月二十三日生）と婚姻、次の

二男二女を挙げたが、明治二十七年十一月七日、僅か年齒三十歳で病死した。法名玄通院釈義照。

長女 テツ 明治十九年六月二十六日生、旅籠町渡辺信藏に嫁す。

長男 鉄太郎 明治二十年十二月二十九日生、東京に移住。

二男 勝太郎 明治二十三年三月二十一日生、旅籠町四八六番地に分家。

二女 友 明治二十六年八月五日生、六日町庄司彦六に嫁す。

渡辺弥太郎



渡辺弥太郎

文久二年（一八六二）十一月二十二日、四日町渡辺吉

兵衛（八代目）の二男として生れ、明治十二年五月、儀兵衛の長女トヨと結婚し、旅籠町四八八番地、足利屋小林玄端の屋敷を買いうけて分家した。はじめ学問に志し、山形県尋常中学校を卒業、上京して東京帝国大学予備門に入学したが、三浦・渡辺両家が山形第八十一国立銀行の経営を引受けると同時、同族の要請により帰郷して銀行経営に当った。人格高潔・篤学の士として一族の信頼厚く、明治二十二年四月、山形市制施行と同時に行われた第一回市会議員選挙に当選、二十五年の半数改選には、兄吉兵衛に譲って議員を退き、山形市収入役に就任した。当時すでに山形第八十一国立銀行は地方金融機関として堅実な地位が定着していたが、その利用範囲は有力企業・財閥等に限られ、一般中小商工業・庶民の利用は困難な実状にあったので、弥太郎は三浦権四郎・同新兵衛・同和平・長谷川直則・同吉内・池田成章・高梨源五郎等銀行幹部を説いて、その出資のもとに資本金二万円の「羽陽貯

蓄銀行」を創立し、市収入役を辞してその経営に当たった。

明治四十三年に再び市會議員に選挙され、爾来、大正二年・同六年・同十年と四期十六年間に、市政に参与した。一面、山形商業會議所常議員となり、市の商工行政・經濟施策に貢献した。かたわら山形地方の歴史資料の蒐集に力を注ぎ、大正九年四月、商工會議所の事業として『山形經濟志料』の刊行を提唱し、文献・文書等を復刻、昭和六年まで全六集を刊行、地方經濟史資料として貴重なものとなっている。

昭和十一年十二月三日、七十四歳をもって没した。

法名岳知院釈沙弥。三男五女あり、家督は二男達太郎（山形銀行常勤監査役）が嗣いだ。

渡辺正三郎

儀兵衛の二男として慶応四年（一八六八・九月明治と改元）三月十二日生れ、明治二十一年十一月、宗家吉兵衛の五女ナミ（明治三年八月二十七日生）と結婚した。

旅籠町五三五・六番地に分家し、三ツ丸吉野屋として、葉種・薄荷商を営んだ。性温厚篤実、明治三十七年六月、推されて山形市會議員に当選、爾来、大正十四年六月まで連続二十一年在職した。



渡辺正三郎

元来山形市は伝統的に市南・市北の地域的対立が激しく、市政・經濟の上にもことごとく相争う傾向があったが、正三郎は常に厳正中立、その斡旋妥結に円満な解決をはかった。特に明治四十四年五月八日の市北大火に際しては、自宅も類焼したが、市長新聞善八を援けて南北抗争の停止と市全体としての復興に奔走した。大火後、明治四十五年一月の市会で議長改選に際し、市会で多数を占める政友派は、渡辺正三郎を指名

推薦によって、議長に選任したが、正三郎はこれを辞し、改めて市会は議長選挙を行ったが、再び多数の投票があり、議長に当選して就任した。爾来、大正十四年六月まで連続議長に当選、南北対立・政党抗争に常に融和仲介の役をつとめ、「田満居士」と呼ばれ、名議長とうたわれた。

その間、商工会議所議員とし、明治四十二年一月、三浦権四郎が会頭に就任すると同時に、正三郎は副会頭に選任され、事実上の運営を担当、市北大火に類焼した市役所内に同居していた会議所事務所の独立庁舎建設を提唱し、市役所構内に当時は珍しいモルタル造り洋風の商業会議所庁舎を建設、また工業振興をはかって商業会議所を商工会議所と改めた。大正二年、山形城下都市建設の基礎を築いた最上義光三百年忌に際し、「義光祭」の開催を提唱、市と会議所が主催となり、十月十七日仮装行列を実施、恒例の一大名物として第二次大戦まで存続、戦後は山形商工祭として復興

した。仙山線国鉄誘致に奔走し、山形・仙台两市経済提携をはかって「陸羽経済会」を組織するなど、商工振興のために奔走したが、昭和三年五月五日、病を得て没した。享年六十一歳、法名薫徳院釈覚立。

五男三女あり、長男恒太郎が家督相続した。宅地跡は現在、山形新聞・放送会館となっている。

渡辺徳太郎

儀兵衛三男として、明治三年（一八七〇）三月七日生れ、学問に志し東京に遊学（前章参照）中、長兄二代目儀兵衛が二十七年十一月七日、三十歳の若さで死去、妻ヨネ（二七才）と長女テツ（八才）、長男鉄太郎（七才）、二男勝太郎（四才）、二女友（二才）の四児が遺された。

次兄正三郎はすでに分家しており、一家保持のため、徳太郎は亡兄の未亡人ヨネと結婚し、その四遺児を引取って養育することになり、義兄（長姉の夫）弥太郎がこれを後見し、徳太郎は再び学業に就いた。明治

三十年、東京高等商業学校を卒業して帰郷、旅籠町四八六番地に分家して一家を成し、兄の遺児を育てた。妻ヨネとの間に二女五男をあげた。

長女 テイ 明治廿九年五月二十八日生、東京本郷区駒込朝倉隆造に嫁す。

二女 富 明治三十一年十一月二十七日生、東京小石川区小日向台町石原秀雄に嫁す。

長男 郁二郎 明治三十四年六月二十四日生、同年七月二日死亡。

二男 友次郎 明治三十六年十月二十七日生、家を嗣ぐ。現存。

三男 増蔵 明治三十九年八月二十四日生、大正十年七月二十四日死亡。

四男 謙吉 明治四十三年十月三十一日生、現存。

五男 義雄 大正二年四月二十八日生、昭和十年七月三十一日、宇都宮市松浦病院で死亡

嗣子友次郎は、山形中学校から山形高等学校を経て

東京帝国大学文学部独文科を卒業、東京市本郷区駒込

神明町若林福重長女ふみ(明治三十九年五月十一日生)

と結婚、帰郷して山形県に奉職、昭和十八年八月陸軍司政官としてマレーに派遣され、現地を終戦を迎え、二十一年内地帰還後、県立山形工業高校教諭、日本大
学山形高校講師を歴任し、現在、山形県史編纂会議員、ふすま同窓会長。

三男増蔵は西条八十について童謡を作り、大正十三年、作品集「糸ぐるま」を出版、前途を嘱望されたが、十九歳の若さで病死した。

三、著 作

渡辺徳太郎は新聞・雑誌等に広汎な著述活動をして
いるが、纏まった著書は無い。繁忙な教育界の第一線
にあり、執筆述作の時間的余裕を得難かったこと、当
時の地方出版界は独立著書の刊行が非常に困難であつ
たこと等に因る。しかし新聞・雑誌に発表された断片
的な論稿、講演・放送の速記・要録等、いずれも時に
応じて啓蒙的・指導的な卓見が多く、中にも芸亭うんていに関

する研究は当時の学界に高く評価され、纏めて一本とし関係方面に寄贈された。また山形市商業界の一般教養のため新聞に連載した『山形商業談』も、後日、私家版として一本にまとめ出版している。

昭和三十年頃、商業学校卒業の市内商店主たちによって結成された山形経友会で、恩師の全著作を渉獵蒐集し、『渡辺徳太郎全集』を編纂刊行したい意向があったと聞くが、実現には至らなかった。今回、本誌で取り上げたのは、その一部である。そのほか、現在解説者の手許にある資料は次の通りである。

○芸亭遺跡実地取調顛末

大正八年五月、日本図書館協会発行『図書館雑誌』第三十五号、同六月発行第三十六号掲載（未完）

○三島県令展覧会誌

昭和七年二月、市立商業学校輪誠会発行、菊版九〇ペー
ージ

○図書館週間と読書

昭和十三年十一月、山形県立図書館発行『山形県文化

時報』第三十一号

○事変感片

昭和十四年一月、同上第三十三号

○我国図書館の変遷を語る

昭和十四年十二月、同上第四二号

○郷土の古代政治経済生活の状況について

昭和十五年一月、同上第四四号

○愛国歌人鈴木重胤翁と山形県

昭和十八年三月同上第七六号

本号収録の著作については、次の点に留意した。

凡例

一、底本として用いたのは、それぞれ印刷に付された新聞・雑誌掲載のものであるが、紅花に関する図解・説明は、著者自筆の稿本をそのまま凸版印刷した。

二、講演または談話筆記のものは、文語体・口語体が混淆しており、特に『山形商業談』において

甚だしいが、すべて新聞掲載のままとした。

用字・用語にも、源因・原因など二様に使われており、特に当時流行した文意強調のために、

○○●、△等の符牒をつけているが、すべて底本のままとした。

三、仮名遣い・送り仮名等も底本のままとし、明らかかな誤字・誤植と認められるものはこれを正した。ただし、若干の場合は右側に(ママ)と傍注した。

四、変態仮名、又は合字(卍||トキ等)は、すべて平仮名に改めた。

五、句読点・改行・濁音等は、解説者において適宜これを付した。

六、各稿の出所については、それぞれ標題のわきに細字で解説した。

なお、遺稿発表については渡辺友次郎氏の快諾をうけ、資料については県立図書館三春伊佐夫氏の協力を

いただいた。著者自筆稿本(四・五)は、市史協力員住吉英作氏の所蔵本を提供してもらった。共に感謝する。

三 紅花の話

渡 辺 徳 太 郎

昭和十二年七月十日午後六時より三〇分間、山形放送局より「趣味講座」として全国中継された要点を、昭和十二年九月十日付、山形県立図書館発行『山形県文化時報』第十七号に掲載された。図版は本文に明らかなように大正五年秋の作で、数少ない遺墨の中で、自筆稿本の伝存されたのは極めて貴重である。図も本人自筆であり、優れた写生力と筆致を見せている（山形市十日町三丁目山形市史協力員住吉英作氏所蔵）。山形商業経済と最も関係の深い紅花について、科学的研究の嚆矢を成したものととして注目される。（後藤）

私は只今から、只今が丁度「べにばな」の花盛の季節でありますので、紅花に關した御話を、主として趣味の方面から、極めて通俗的に申上げて見たいと思ひます。先づ順序として紅花とは何う云ふものでありますかを、簡単に申上げて置き度いと思ひます。

紅花と云ひますのは、一種の草花の名であります、婦人の化粧にします紅とか、紅絵ノ具とか、又紅染・紅絞とか云ひます紅は、昔は凡て此の草の花から製出されたもので、夫れで此の名を紅草とも紅花とも、又紅花とも申したもので御座います。

之れを今、植物学上の分類から申しますと、菊科に属する越年生の耕作植物になつて居りまして、学名では和名「べにばな」と申して居ります。漢名では紅藍花、LATIN 名では CARTHAMUS TINCTORIUS、英語では SAFFLOWER と申して居ります。

花の形は丁度薊の花に能く似て居りまして、莖は一本立に三・四尺程延びます。葉は互生になつて居りまして、葉の縁に鋭い刺があります。而して莖の上部の方に参つてから、枝を斜に上の方に向つて三・四本から五・六本も出します。而して其の莖の先端及び枝の先端に、夫れ夫れ一つ宛の丸い薊の花と同じやうな先の尖つた、丁度擬宝珠形の頭を着けまして、其の頭の先

の尖った処から、黄色い紅絞りの美しい奇麗な花が咲くのであります。

紅は、其の花を摘み取りまして、夫れから製造するのであります。其の花を摘み取りますのに、丸い擬宝珠形の首球くびだまの周囲には、葉と同じやうに沢山鋭い刺がありますので、一寸技術を要しますが、うっかりしますと刺に刺されるのであります。夫れで紅花の花を摘みますには、朝早く、花に朝露の掛かって居ります内に摘むのであります。夫れは夜露の爲めに刺が幾らか柔らかいで摘み取り易いからであります。

そこで、斯うして摘取りました紅花こうくわの花を沢山集めまして、次に「寝かせる」と云ふ工程を経まして、夫れを径一寸位の塩煎餅のやうな形に、両手の平ひらで丸めて平たくしたものを之を花餅と云ふのであります。之を花薙の上に並べて天日てんびで干すのであります。其の干し上ったものを干花かんなと云ふのであります。此の干花を特製の花袋はなぶくろに入れますして、之を薙包みの荷物にせに梱くっ

て、夫れを最上川を川船で下だし、酒田港から京都・大阪・近江の方に上せまます。江戸には陸路で送ったものであります。産額は最上千駄と称へて居りました。が、實際千駄処ではなく、千駄以上あったのであります。而して紅は此の干花を原料として、紅屋の手に依つて、製造されるのであります。何回かの工程を経て、最後に出来まます赤黒い泥状の製品が、即ち之が正味の紅・本紅であります。

我国では此の製品を「べに」といひますが、支那の語では燕脂と云ひ、外国では之れを ROUGH と云ひます。そこで此等の語の語源を見ますと、日本語の「べに」は、延べられた丹色にじいろ、即ち赤色と云ふ処から「べに」と言はれたやうに思はれます。又支那の燕脂と書きますのは、昔此の紅が燕の国で、初めて紅花から脂のやうな紅を作り出された処から燕脂と呼んだものであるさうであります。又外国語の ROUGH と云ひますのは、原 LATIN 語の RUBREUS、即ち英語の RED

赤色と云ふ意味の語から生れた語であります。

次に紅花の沿革でありますが、西洋では埃及の木乃伊ミイラの中に見出されると書いてあり、又地中海の LEVANT 沿岸が原産地であるとも書いてあります。

東洋では印度が原産地と言はれ、印度から支那に來ましたものと思はれます。夫れは、支那の漢の時の張騫ちやうけんと云ふ人、此の人が今より二千四・五十年前、我國の開化天皇の御時に当りますが、支那の西方西域と云ふ印度の北部に使しまして、十年余り西域に居り、漢の武帝の時に、紅花の種を持って帰り、之を長安の都に移植したと立派に文献に載せてありますから、支那に紅花の入ったのは、之れを以て始として宜からうと思ひます。

而して支那から日本に入りましたのは、何時頃のことになりませうか。之れは判然致しませぬが、支那の張騫の時から約二百年後、恐らく応神・仁徳兩帝の頃でありますまいかと思はれるのであります。夫れは

古事記に依りますと、応神天皇の時に、吳の国から呉織はたを求められたことがあり、夫れと共に染物・織物の技術が入ったのでありますから、其時、染物の原料として、干花の紅花も日本に輸入されたのではないかと思はれます。併し其時紅花の種をも取寄せ、移植栽培されましたか何うかは判りません。

次いで仁徳天皇の御時に、皇后が大和の方に行かれし時、天皇から口子臣くちこのおみを御遣はしになり、天皇の御詠およみになられた御歌を皇后に差上げられたことが御座います。口子臣は皇后を御訪ね申上げ、御庭の中に跪いて其の御歌を差上げました時、折しも強い雨が降り、口子臣が着て居りました紅い紐から色がにじんで、皆紅あか色に変わったと古事記に載せてありますが、此の紅い紐の事を「くれないのくくり」と訓なでありますから、恐らく紅染べにぞめであったやうに思はれます。又其の紅色くれないいろが水の為めににじんだのは、之れは単に紅染の技術が未熟であったばかりでなく、或は当時既に栽培され、摘

み取った紅花の生花を以て其儘に染めた為かとも考へられます。

夫れから二・三百年後の万葉時代になりますと、摂津・大和の間には、最早一般に栽培もされ、紅にも作られ、染料にも用いられ、又觀賞もされ、万葉集の歌の中には「からゑの花」、「うれつむ花」、「くれなゐの花」として、あらゆる角度から紅花のことが読まれて居るのであります。

其後約八十年後の延喜式に至りますと、其の中には、紅花の使用量が非常に多くなり、当時日本全国六十八ヶ国の中で、南は安芸の国から山陽・山陰・北陸・南海・東海・常陸・下野まで二十四ヶ国から、貢物として納められてある位になったのであります。併し其の中に出羽国が載って有りませぬから、当時、今の山形県には、未だ紅花が産してなかつたのでありませう。

更に約百年後の平安朝時代、今より約九百年前のこ

とになります。彼の紫式部の源氏物語の中に、末摘花即ち紅花の物語が書かれてあります。例の鼻の先の赤い姫君のことを、光源氏の君が、末摘花は花の先が赤い処から、彼の鼻赤の姫君を末摘花に擬なぞへて歌を送ったり、又源氏の君が意中の才媛である紫の君に、源氏の君が自分の鼻の先に紅を塗り着けて嫌ではないかと言ひまして、何んでも源氏の君は鼻先の赤い紅花を嫌ふことが書いてありますことは、皆様の能く御承知の通りであります。

其後中頃となり、我国に紅花の栽培が一時衰へ、舶来の紅花が輸入されましたことは、足利時代から徳川初期に於ける往来物や名寄せの類に依つて知ることが出来ます。

併し徳川の初、慶長前後になりますと、紅花に関する文献が少し見へるやうになり、臚氣に紅花の栽培が想像されるのであります。詰り足利時代から徳川時代の中頃までは、舶来の紅花と内地産の紅花と相俟つ

て使用されて居ったやうに思はれます。

徳川時代になりまして、紅花栽培の復活とも云ひませうか、再興後、最初に紅花を産して居りますのは、私の調べました狭い範囲に於きましては、三代將軍家光公時代の正保・慶安の頃で、出羽の最上と陸奥の信夫と、此の二ヶ国であるやうに思はれます。

夫れが元禄には六ヶ国となり、正徳年間には八ヶ国となり、天明以後明治初期までは、十二ヶ国から産出するやうになったのであります。夫れで今、往古より今日に至るまで、素より時代を異にして居りますが、

我国に於て紅花を産しました国々の数を挙げますならば、南は薩摩から北は北海道に至るまで三十九ヶ国になり、全国殆んど産せざる処なしと申しても宜しい位であります。其の内、紅花の産地として名のある処は、薩摩・筑後・伊賀・信州・武州・相州・上総・下総・常陸・下野・出羽・奥州・一ノ関・越後等で、就中最も著名の産地は出羽の最上であつたのであります。夫

れは、他の国々は皆或時期に限られたるに對し、最上は元和・正保・慶安の頃より、明治初年に至るまで前後二百年以上にも渉り最も永い間、最も優れた品質のものを最も多量に産出しました為で、遂に最上紅花の名を成した所以であります。

随つて紅花は此の地方の特産物となり、富源を成し自然大きい紅花商人も輩出し、又京都・大阪・近江からは支店・出店を置きまして、盛に売買取引が行はれてあつたのであります。

併し之れは、今は全く過去のことと、明治の初年、西洋から化学染料が盛に輸入されるやうになりました結果、国産の紅花が西洋染料の爲めに圧倒され、現在では化粧料本紅でさへ、主として支那と印度から輸入され、永い歴史と伝統を持つて居ります国産の紅花の栽培も、内地には殆んど其の跡を絶ちまして、纔に名残を山形市外出羽村附近に留めて居るに過ぎないのであります。又山形市の初市と云ひまして、年の始の一

月十日に行はれる市神の祭礼の時に、縁起物の一つとして、露店に売出される「盛り飴」と云ふものがあります。之れは昔紅花の花餅を花麩の上に並べて天日に干した時の有様を形取ったもので、之を神棚に供へまして、紅花が豊作であるやうに、又商い繁昌を祈ったのが起原となつて居るのであります。

「盛り飴」の形は半紙を半折したものの片面に、丁度鹿の子模様のやうに、水飴を点々と小さく盛り上げて置きましたものであり、之れを葦に挟んでひらひらと小さい旗のやうにしたものであります。是等も、昔国産第一とされし最上紅花の花餅を干す時の有様を偲ぶ唯一の面影として、残つて居るに過ぎなくなつたのであります。

凡ては時勢の然らしむる所で止むを得ませぬが、国産紅花の爲めに、深かく惜まるる所であります。

之れに就きまして、私一個の管見に過ぎませんが、色々な理由は今差置きまして、結論だけを申し上げます

ならば、出羽村附近を紅花栽培指定地としまして、国産紅花の保護存続を計ると同時に、本紅の効用をもつと宣揚しまして、其の使用を普及したら何う云ふものかと考へます。

最後に、俳聖芭蕉と紅花の句に就て申上げて見たいと思ひます。芭蕉は彼の奥の細道を最上尾花沢に鈴木清風、清風とは清風よひゆきと書きますが、其の清風、通称八右衛門と云へる人の許を尋ねられ、草鞋の紐を解かれたのであります。清風のことを奥の細道に次の如くに書かれてあります。読み上げて見ます。

「尾花沢にて清風といふ者を尋ぬ。彼は富める者なれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情を知りたれば、日頃とどめて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る」

とあります。之れに依て清風の風格も略々窺はれると思ひますが、芭蕉の言にもあります通り、清風は尾花沢の大きい紅花商人で、始終江戸に上つて居り、寛潤

な気前で、紅花大尽とさへ謳はれしと云ふ程の人であります。芭蕉翁の門に俳諧の道を学び、俳諧を能くした人であります。

「君は今駒形あたり郭公」と詠める彼の名妓高尾の句は、清風を指して読んだもので、歌舞伎の先代萩でやります高尾太夫が、奥州仙台頼兼公の意に反いて一命を捨てたのは、実は愛人清風の為めに、死を以て節を完ふしたものと云へられ、別れに臨んで、高尾から清風に形見に贈られた人丸の木像は、今に鈴木家の家宝として伝へられてありますが、古雅掬すべきものであります。

さて、芭蕉翁は清風の許に滞在中、人の勧めに依りまして、山形領の山寺と云ふ慈覚大師の開基入定地で、又景勝の地がありますが、此の有名な霊場に七里の道を態々参詣に巡られ、夫れより大石田に行かれ、此処に亦滞在されたのでありますが、夫れは時恰も元禄二年の仲夏で、丁度紅花の花が咲き出しまして、之

れから盛んにならうかと云ふ頃であつたのであります。

夫れは、紅花の花は俗に「半夏はんげ一つ咲き」と云ひまして、半夏生の季節になりますと、一枚の花畑の中で必らず一つ咲き出すのであります。一つ咲き出しますと、其後続々咲きまして忽ち花盛りになるのであります。そこで本年の暦で申しますと、半夏生は七月二日になつて居り、又奥の細道の日程に依りますと、本日は旧暦の六月三日で、丁度芭蕉翁が羽黒山に登られて居る日でありますから、芭蕉翁が尾花沢・山寺・大石田を巡つたのは、半夏生前後から昨日あたりまでのことと、紅花の花の咲き初めから当まさに盛りになり掛けの時になるのであります。

広々とした村山平野は、四方翠巒を以て圍からされ、其の中央を貫流して居ります最上川の清流を挟みまして、東西両方面に展ひらけて居ります畑と云ふ畑は、山の奥に至るまで、殆んど紅花の畑でありまして、見渡す

限り、美しい紅花色に彩られてあつたのであります。

其の間を枯淡な姿の旅人芭蕉が、弟子の曾良そらを従者に伴れて、尾花沢から山寺へと花畑に沿ふて歩みを運んで居るのであります。其時、俳聖芭蕉の眼に紅花は果して何う映じたことでありませう。

紅花を詠まれた翁の句が二つあります。之れは皆様も御承知の通り、一つは、

眉掃まゆはらを佛ほとけにして紅粉べにの花

と云ひますのと、一つは、

行末ゆきすえは誰たれが肌はだふれん紅べにの花

と云ふのであります。

二つ共、誠に名句と存じますが、今此の二つの句意に就いて聊か門外から考へて見まするに、「眉掃」の句は、客観の句で、紅の花が化粧道具の小さい眉掃の様な形をして咲いて居る。化粧することを一言ひとことに紅白粉と云ふて、紅と白粉とは密着不離ちよくふりの語ことばになつて居るが、如何に紅と白粉とが密着不離の堅いコンビをなし

三 紅花の話

て居るとは云へ、紅にならない草の中から、紅の花の形が白粉後に用ゆる眉掃の形をして咲いて居るとは、紅の白粉とは能く能く縁の深い仲になつて居り、如何にも面白いと云ふ意に解さるるのであります。

次の「行末は」の句は主観の句で、紅の花が今美しく咲いて居るが、紅となつて其の行末は、何処の人の肌に触れることになるものか、定め難いと嘆賞された句と思はれますが、源氏物語の末摘花の末文に、

「かかる人々の末々いかなりけむ」

と結ばれてあるのに対し、更に更に、含蓄深長のやうに思はれます。

徳川の末天保年間に、松亭金水と云ふ作者の編あみました五篇十二巻の「閑情末摘花」と云ふ小説本がありますが、之れは芭蕉翁の此の「行末」の句意を種として作つたものであります。松亭金水の自序に明かに書いてあります。

私は、余談になりますが、此の人生観の籠つた「行

末は」の句に就て聯想を禁じ得ませぬことは、彼の在原業平の東下り、三河八ッ橋の牡若を詠める歌と、

源義家の勿来の関に桜を惜める歌と、芭蕉翁の最上の

紅花を詠める句との対照であります。何れも「旅」に

花を賞せるものでありますが、殿上の才人と名だたる

武將と、庶民に隠るる俳聖と、夫れ夫れ階級を異に

し、随つて感想を異にする処に、非常に興味があるや

うに思ふのであります。今私は仮りに、業平の歌を

羈旅寄花と云ひ、義家の歌を軍旅惜花となし、而し

て芭蕉翁の句は、羈旅嘆花と申したいと思ふて居り

ます。私は此優れたる三人者の歌と俳句とを以て、恐

らく「旅」に花を賞する日本三絶と申して然るべきで

あるまいか、と常に聯想を禁じ得ないのであります。

終りに何しろ紅花には非常に古い歴史があり、染草

としては常に其の王座を占め、又紅は婦人粧の第一と

してあったのでありますから、自然紅花及び紅に関し

て色々な事があり、紅花を中心として、あらゆる方面

から觀察され、色々と申上げたいこともあります。今回は之れを以て紅花の御話を終ることに致します。夫れでは失礼を致します。有難う御座いました。

四 紅花の話図解

(渡邊徳太郎自筆本)

(注 図版中の網目は、彩色(紅色外)の分を示した。)

大正五年十月乃日本圖書館協會
總裁侯島村徳川頼侅侯様山形市に
開催全國圖書館大會終了後自宅
而主筆、際市話申上

大正十年七月秩父宮高松宮兩殿下
山形市成、際高島陳列場構上、
陳列台覽、供セリ

紅花の話

渡邊徳太郎圖解

紅花、話圖解

渡邊徳太郎圖解

紅花ノ原産地ハ詳カナラセシ記録ニ微スニ
印度ノ如ク印度ヨリ西域ニ傳リ漢ノ張騫西
域ヨリ支那ニ傳ヘ支那ヨリ又之ニ錢劉ニ
傳ハレルナリ

我國ニ至ル氏物語ニ末摘花ノ語ヲ見ハ古ク
早知ラレタル事トス末摘花トハ紅花ハ末ヲ權ニ
採ルニ云フナリ

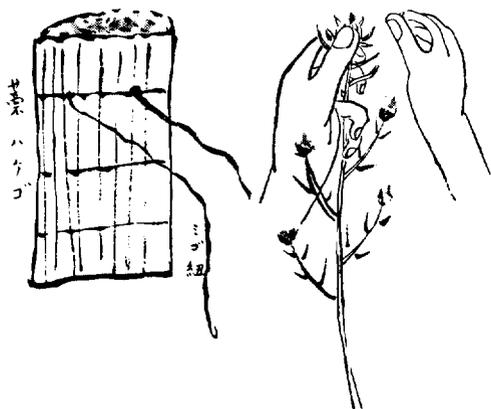
延喜式ニ奇服料トシテ多ク用サレシニ記載ナ
リ當時ヨリ廣ク且多ク用サレタルモノト也

紅花ハ我國ニハ水戸伊豆最上(今村出郡)
其他ニ毛産セル毛最上産ヨリ品質最良トセリ

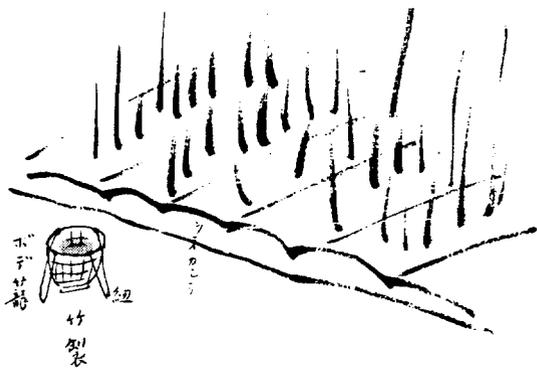
四 紅花の話図解

花は朝早く雨降るに間に合う

備ミタル
花ヲ入レ
ハケゴ



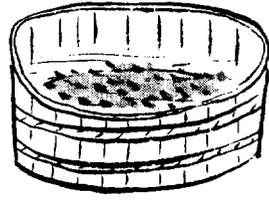
(12)



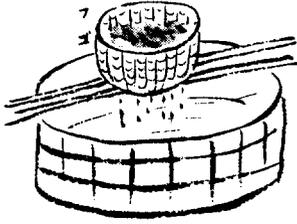
ビクニ摘取リタル花ヲボテニ移シ
家ニ運バ
花ヲ入レ 鉢大物
蜜ハ油ハ取ル 揚モノナド 殊ニ美味クシ

桶ニミズヲ注シ水ヲ入レ
クル半切ニ入
是ニテ踏ム

半切ヨリワゴニ
上ケ入レ
キケ(黄気)ヲ
レボリ出ス
レボリ出シテ
後川ニミツ業
振ヲナス



三天



8

半切ニレボリ出
シタル荒黄気ヲ
別ナル半切ニ没
ス取リ

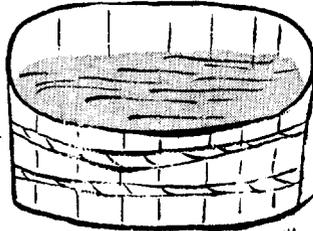
此ニ白ナラシ
メ粗ナル木綿
一及ヲ入レ兩手
ニテ揉ム

揉ム紅花色ニ
染ル

一及ノ深紅氣ニ染付
百五十ナリ

傍ノ(一)

深ナル際ニ黄気ノ中ニ
梅実ヲ入ル紅色ヲ
引出ス媒合ヲセテリ

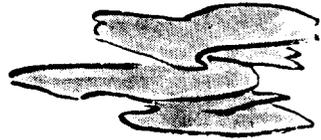


半復
メ梅
ノ実熟
ス吹
ハ梅
ナリ

四 紅花の話図解

(五) 紅花の製法(二)

ぼろろ
木俵



こまかくこまかく

木俵

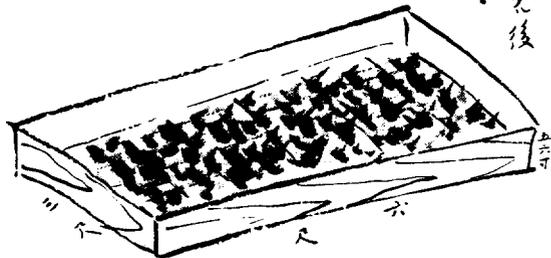
子供着物、裏

こまかく



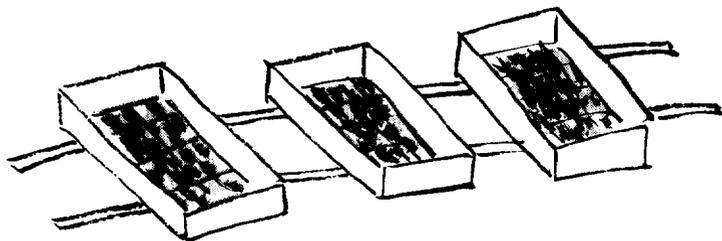
(六)

黄丸を取り去る後
セロシ入レテ
ナラシ



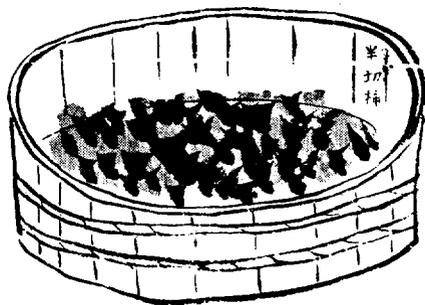
(七)

並ハシルセロコ
朝 雨 替 ヲケレ
二日ニ晩
ネセトム
二晩目ニ
ネバリ先
ヲ生ス



(八)

ネバリ先出タル花ヲ
セロヨリ集フ
半切ミ入レ
詰ム
之ヲ足ミシテ
踏ミコサス
ネバリ先
強クナリ餅
如クト
ナル



(七)

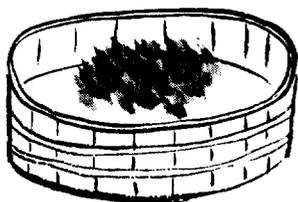
四 紅花の話図解

大半切ヨリ
一辨位ツ、
小ダライコ
ニ分テ渡ス

女子供之ヨリ
花餅ヲ手合
セシテ作ル



花餅



小ダライコ

一辨ノ花餅ヲ
白シロ五六枚
並ニ
天日ニテ乾ス

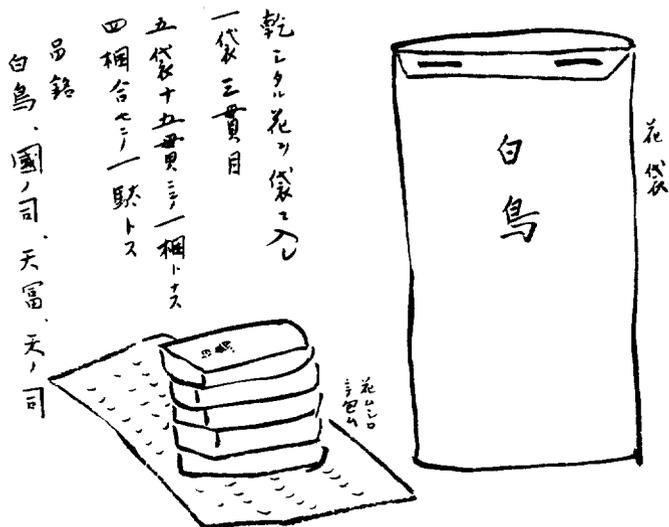


花餅



正月廿初市ニ
ヒヤク盛リ餅ハ
此ヲ形取リタル
モノ

(11)



(12)

直鼓ト産額

元録ノ頃 徳永年三四百駄産出
 當時而後 志駄ニ百三貫文(一貫ト五文)

天保ノ頃 志駄直鼓 三十五兩
 大坂ノ行キ 五十兩位トス

當時山形・商人ノ 大坂ツルハ花ノ産額
 八九千駄位ナリ

慶應ノ頃 志駄 三十兩位

明治三三年ノ頃 ガラ州ノニ歩全通用シ
 志駄 十四兩ニナリ

紙幣通用ノ時 六百八十兩ニナリ 是ノ最後ナリ

大正五年九月山形縣志佐川郡佐川、奥州六縣
聯合共進會演藝館ニ花摘踊り上演せ
り之し往時紅花ニ当地方ニ一大富源ありし
り産業獎勵ノ志方ニ是ナ花摘踊りノ賑ヒ
状況リ材料ニ樟仁根ニクルモノ三人ノコト
當時リ回想ニハ一端ニ供ナルナリ
當時花摘花摘ノ際佐詠ヲ歌ヒヨカラ
之、往時より今茲ニ歌、一ニリ考テ
若瓊 紅花畑ハ本編國辭若ノ戯レニ
作ルモノナレバ紅花、始終ノ事實ノ
儘ニ綴レルモノナレハ其ノ左ノ附セリ
三) 繪ビラ、右肩ノ僧ハ其ノ指張ナリ

○紅花摘唄

世にも賑はしべに花摘よ、こゝもかしこも唄の聲
明ぬうちから畑邊に行て、見ればうつくし花明り
晴れて見事やべに花摘の、笠に移るや旭の光り
さても見事や紅花の畑よ、闇も明るき花盛り
艶を含みしべに花摘よ、こゝろ勇めば氣も晴れる
畑邊通たるをもじを見れば、いらかすのも何の其
同じ畑にてそもじと摘めば、雨や風にも厭やせぬ

○紅花染唄

花の六月二度あるならば、枯れた枝にも花が咲く
紅花染なら今晩限り、あすの晩からうすくなる
夜毎賑はし紅花染の、晴れて聲へる唄のこゑ
紅花染なら色よく染れ、色がよければ氣がいさむ
好きなそもじと紅花染よ、一夜く濃くなる

○山形名物 紅花畑

忍我戯作

眉掃を俤にして紅の花と、翁の詠る名所は、出羽最上の花の里、花の六月その頃ほひの、里の邊の賑やかさ、花摘唄『さても見事や紅花の畑よ、闇も明るき花盛り』摘ましやれ摘ましやれ摘ましやれと、このもかのもに聲麗はしく、花摘む人の手元から、夜も明け渡る野の景色、見渡す限り遠山の、霞に續く花畑、霞にこもる村々に登る煙の賑ひも、實にこの花の恵かや、摘めばこぼるゝ花の露、露に潤ふ花市の、賣買ひ繁し花買場、扱てその花のねせやうは、向、鉢巻裾からげ、一は荒振り二は中振りよ、三は揚振りきけを出し、摘まみ花餅乾す花蕊、敷き連ねたる趣は、鹿の子模様をその儘に、染めいたしたる花ころも、黄氣を含めて白布染むる、業も賢し女連、かけ聲そろう花染の、唄の拍子も面白や。花染唄『夜毎賑し紅花染の晴れて聞へる、唄の聲』もましやれもましやれ

こいきてもましやれ、よいやる、よいよいやさ、開け行く御代の恵に賑ひも、昔に増さる花の山形陸月十日の初市に、市人賑ぐ盛飴は、土地繁榮の基よと、今の世までも言ひ傳ふ、花の蕊に乾す花餅の、名残とこそ知れ。

〔明治四十一年三月稿〕

同日朝 灰水ノ樽方ヲナス

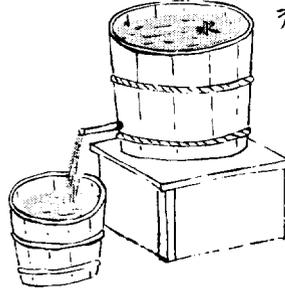
灰水ハ樽ノ底ニ積たまり依よラ

敷キ其上ニ土灰ヲ積

ミセニ水ヲ入レ通スナリ

此ヲ通セル水ヲ三四回繰

回シ通セバ清水トナル



先ニ轆轤ニ拭ケ黄葉ヲ取リベタカタナリ

タル花餅ニ右ノ清水トナリ先灰水ヲ拭ケ

羊ミ揉ソハ水ノ色 莫黒トナルナリ

此莫黒トナリタルモノヲ袋ニ入レ所ニ轆轤

ニ拭ケ水ヲ絞リ其ノ水ヲ桶ニ受ケ

(2)

轆轤ニ拭ケ絞リ出シタル莫黒ノ水ヲ
受ケタル桶ノ図

此水ニ節ヲ加ヘルト

紅カ出ルナリ

紅出テ水色赤ク

ナリタル時水ノ中ニ

ぞぐヲ入ル

ぞぐトハ青サヤ水ノ中ニ

浸シ幾回モ揉ミタル結果

綿ノ如クニナリタルモノナリ

紅水ノ中ニぞぐヲ揉

ソハ紅分ぞぐニ吸ヒ取ラ

レ水ニ黄葉ノミ残ル



14)

又別ニ木綿過シヲセル奇麗ナル灰水ヲ

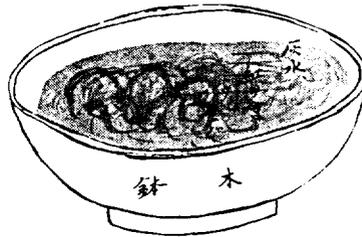
拵エ之ヲ陶器ノ鉢ニ入レ置キ

別ノ木鉢ノ中ニテ此灰水ヲ

紅リ愈ミタル迄ぐニ拭ケルコト

三四回スレハ水ハ

黒赤キ水トナル



(15)

此黒赤イ水ヲ陶器ノ鉢ニ入レ

又別ニ烏梅ヲ能ク洗ヒ水ニ浸シ酢

ヲ化サシメ別ノ陶器ノ鉢ニ入レ

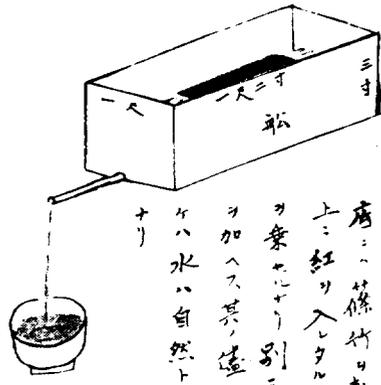


此、酢、木鉢ヨリ
少シツ、酢ヲ茶椀
ニテ浸ミ取り



紅汁、木鉢ニ入レ
合セ調和ノ度ニ達
スル時ハミエリト云フ
膏ヲ覆シ乾カヌテ
紅ト水ト石離シ
紅粒カ細ク見エ

此紅ト水ト方離セル井鉢ヲ庭寐時ニテ
 動捲セラル處ニ置テハ紅方ハ下ニ沈澱ス
 此沈澱セル紅ヲ取リ水方ヲ去レ為シ船ニ
 掛ケル夫レ三井鉢ノ上水ヲ静ニ溜シ
 底ニ沈澱ス居ル紅ヲ羽ニ重ノ絹布
 入レ船ニ拭ケルナリ



唐ニハ竹條竹ヲ數テ其
 上ニ紅ヲ入レタル二明京
 カ葉セルナリ別ニ壓力
 ヲ加ヘス其ノ儘ニ置
 ケハ水ハ自然ト垂ル
 ナリ

一庭經過セハ水ハ切レ居ル而シテ羽ニ重
 面ニ残レル紅ヲ竹ノ筒此ニテ小竹箱ニ移シ
 取ル是レ化粧ニ用ナル紅ナリ
 此水方ヨ倉ハ紅ハ腐敗シ易シ依テ陶器
 ノ小猪口ニ塗付ケ乾燥セシメテ保存
 シ販賣ニ供ス

花餅百匁ヨリ紅六匁ヲ生テ

乾燥シタル紅
 紅紫色ニ光ル



(7)

以上山形等所紅製法並ニ元洲製法成テ誤認
 ニ據リ圖解ス